

児童心理 2019 年 1 月号

「対人関係と自我の発達から子どもの秘密を考える」 目白大学教授 小野寺敦子先生著

1. はじめに

今回は、児童心理 2019 年 1 月号に掲載された、目白大学教授の小野寺敦子先生の著書「対人関係と自我の発達から子どもの秘密を考える」を読んで、私が学んだことを述べます。

2. 私が学んだ大切な言葉

大人が日常生活の中で使う「秘密」の意味は、大きく分けて二つある。その一つは「誰にも言わないでほしい」と人から言われたことを、忠実に守って話さないでいる「秘密」である。「これは私だけが知っている情報だけど、あなたなら教えてあげる。だから他の人には絶対に黙っていてね」という場合などで、あなたを信頼しているから話しているのであり、「あなたと私だけの約束」といった親密な関係性である。もし相手が秘密を誰かに話してしまい、そのことがばれたら「約束を破った。裏切った」ということになり、その後の二人の関係は悪化する。もう一つの「秘密」は、自分の知られたくないことを人に言わない場合の「秘密」である。自分の病気や自分の過去などのネガティブな秘密や、自分は資産家の娘であるなど羨ましいと思うことを秘密にしておきたい人もいる。両方に共通して人に隠しておきたいと思う理由は、もしその秘密を話すと、相手がそれまでとは違った目で自分を見るかもしれないという危惧があるからかもしれない。

子ども自身もつ「秘密」について、小学生 1 年生から 6 年生までの 70 名に対して行った調査の結果では、「ある人のことを好きだ」(85 名)、「家出したい」(59 名)、「テストで悪い点をとった」(52 名)が知られたくないことの上位三位を占めていた。親から秘密の内容を言うように言われたときに「言いたくない」と主張することは子どもと親との間に対等な関係性が生まれてきているためである。秘密や嘘という手段は、子どもたちの成長してゆく脆弱な自我には欠かすことのできない防衛のための方略である。人が秘密を隠そうとして嘘をつくことがよくあるが、このような嘘は「防衛的な嘘」と呼ばれる。秘密がばれないように子どもが嘘をつくようになるのは、子どもの自我が発達していく上で重要な意味をもつ。

3. おわりに

こどもが秘密を守るために嘘をつくことは、こどもの自我が発達しているということを確認して、単純に「嘘をつくことは悪いことだ」と決めつけるのではなく、こどもの心を受け入れることが大切であると思います。

KM テクノソリューションズ代表 南側晃一